

エール

市川 浩
いちかは ひろし

昨年NHK朝の連続テレビ小説十五分番組にて「エール」と題して古關裕而先生の一代記劇放映せらる。この番組長年繼續し、様々の作品放映せられけるも、小生現役時代は出勤時間帯に重なり、退職後も餘り興味を惹かれざれば、視聽する事も少かりき。昨年はコロナとて自宅待機の日々、出演の志村けん丈コロナ禍の訃報もあり、放映も時々中止、再放映となる場合も屢々あり、何となく目にする内に、特に古關裕而(役名古山裕一)役の主演窪田正孝丈の自然體の演技構成に惹かれ、秋以降續けて視聽するに至れり。

古關先生が日本語の本質を音楽に表現なされたるは、聲樂家藍川由美先生の御著書にて一應承知致しをりしが、今回更に戦中戦後を通じて、廣く日本人の心に響きける事、作曲に際しては、樂器により音程を聞かるゝ事なく、専ら原詩の文字によりなされたりと知り、國語の聲調自づから西洋音楽に適合し、故に「作詩」は「作詞」に非ざるを再理解せり。

昭和三十九年(1964)六月、國語問題協議會は各界有識者に對し、所謂新表記による國語の危機的狀況を憂へ「同胞各位に訴へる」運動を展開せるに、多くの識者之に贊同し、其の數一千三百名に達す。同協議會「四十五年史」卷末に其の全御芳名を記録し有る中に古關先生の御名を見る。口語詩全盛の昭和初期、其の旗手たりし萩原朔太郎、宮澤賢治兩大人敢て文語詩への歸還を果す。戦後もなほ暫し健在なりける文語詩の字母假名は結合して自づから新しき音^ねを奏^{かな}づ。古關作品は正にこの文語詩の音楽と言ふべし。

實はこの年第18回五輪東京開催の年にして、選手入場のオリンピック・マーチは古關先生の作曲に成る。連續テレビ小説「エール」にては不思議にもこの音楽の放送はなく、代りに同オリンピック・マーチに對する山田耕筰先生(役名小山田耕三)の「最高の讃辭」として紹介せられたる中に「我は終生音楽を愛したり。然れど音楽は君を愛せり」とありき。正に天才は天才を知るとはこの事なるかと感銘深きものあり。

三月二十六日第32回五輪東京開催なほ未定の中、聖火リレーは東日本大震災後十年に當るを以て福島を出發す。コロナ問題未解決の故にか、同地の御出身にて名譽市民にても在らるゝ古關先生のオリンピック・マーチの演奏もなく、沿道の市民も靜肅に拍手のみにてエールを送る。この「エール」の語、原義は苦痛、恐怖、或いは忿怒に驅られ、口も利けずに發する怒號(ブリタニカ辭書)なるも、米語にて大學應援團の聲援の意味を取り、眞摯なる精進と有終の美を祈念する溫き聲援と邦譯するは「もののあはれ」の傳統の故なるらむ。

折しも地球温暖化の故なるか、櫻は彌生の内に満開を迎へ、早くも散り始む。彼の賢治大人文語

復歸の詩に「風櫻」^{ふうあう}とて、

風にとぎるゝ雨脚や、

みだらにかけの雲の鈍^にぶ。

まくろぎ枝もうねりつつ、

さくらの花のすさまじき。

あたふた黄ばみ雨を縫ふ、

もずのかしらのまどけきを。

いよゝにどよみなみだちて、

ひかり青らむ花の梢^{うれ}。

開花前の櫻が春の嵐を堪へ切りて、青空が顔を出す時を迎ふる、其の強靱さを詠ふあり。
開會に邁進の橋本聖子東京五輪組織委員長に心より「エール」を贈りたし。

(令和三年十一月三日受附)